

「肉」から「社会的なものの肉」へ—メルロ＝ポンティの政治哲学についての試論

田中 雄祐（東京福祉大学）

本発表では、メルロ＝ポンティの未完になっている後期の政治哲学を「社会の肉（chair du social）」という概念を手掛かりとして（部分的に）解明することを目指す。メルロ＝ポンティは急逝したこともあり、その政治哲学は未完のままにとどまっている。金田（1996）が指摘しているように、このメルロ＝ポンティの「書かれざる政治哲学」を解明するためには、「メルロ＝ポンティの政治哲学研究」という枠組みでは不可能である（金田 1996: 261-262）。そこで必要となるのが、後継者の一人であるクロード・ルフォールの政治哲学を手掛かりとしてメルロ＝ポンティの「書かれざる政治哲学」に迫っていくというアプローチである。

具体的には、ルフォールが用いている「社会的なものの肉」（Lefort 1986: 24）という概念に着目する。よく知られているように「肉」はメルロ＝ポンティの後期思想の代名詞ともいえるべき概念である。もっとも、メルロ＝ポンティは「肉」という概念を主として存在論において用いているが、ルフォールはそれを社会的な領野に応用しようとしている。発表者はこの「社会的なものの肉」という概念に注目しながら、メルロ＝ポンティの「書かれざる政治哲学」を読み解いていくつもりである。

とはいえ、このような試みは松葉（2010）や宇野（2008）によってすでに行われている。両者に共通しているのは、「肉」＝「可逆性」として捉えているということと「脱身体化された民主主義社会の多様な側面」（宇野 2008: 273）を「肉」のモデルで考えている点である。すなわち、ルフォールは近代以前の社会から近代の民主主義社会への移行を「身体」から「肉」への移行として捉えている。アンシャン・レジームの社会では、社会の統一性は国王の身体によって表象されており、それに基づいて社会秩序が形成されていた。ところが、民主主義社会とはこのような「身体」による社会の統一性の表象ができなくなった社会なのである。そして、「身体」によって表象できない社会を把握しようとするときに必要となるのが可逆性という特徴を備えた「肉」という概念だ、ということになる。

これに対して、発表者はメルロ＝ポンティが「肉」を「エレメント」（VI: 181）や「次元」（VI: 185）と呼んでいることに注目する。例えば、知覚が可能なのは、私の身体（の能力）と対象との間に対応関係が成立しているからであり、また私と他者が同じものを知覚できるのは私の身体と他者の身体が同じ知覚の仕方や能力を共有しているからである。要するに、私の身体、他者の身体、対象に共通する「エレメント」が「肉」なのであり、「肉」とは知覚を可能にしている原理なのだ。そして、「社会の肉」とはこの「肉」という概念を社会的領野に拡大したものだと考えられる。社会においては特定の秩序が成立しており、その社会の成員である私たちはその秩序に順応している。このような社会を成立させる原理こそが「社会的なものの肉」なのである。

【参考文献】

VI : Merleau-Ponty, M. (1964). *Le visible et l'invisible*. Paris: Gallimard.

Lefort, C. (1986). *Essai sur le politique*, Paris: Editions du Seuil.

宇野重規. (2008) . 「メルロ＝ポンティ/ルフォール——身体論から政治哲学へ」, 『現代思想』, 36 卷 16 号, (pp. 264–275) .

金田耕一. (1996) . 『メルロ＝ポンティの政治哲学』, 早稲田大学出版部

松葉祥一. (2010) . 『哲学的なものど政治的のもの』, 青土社.